



皆さん、お元気でいらっしゃいますか？

ドイツは、先週から夏時間になりました。ハンブルクは、青空の広がる爽やかな日々が続いています。

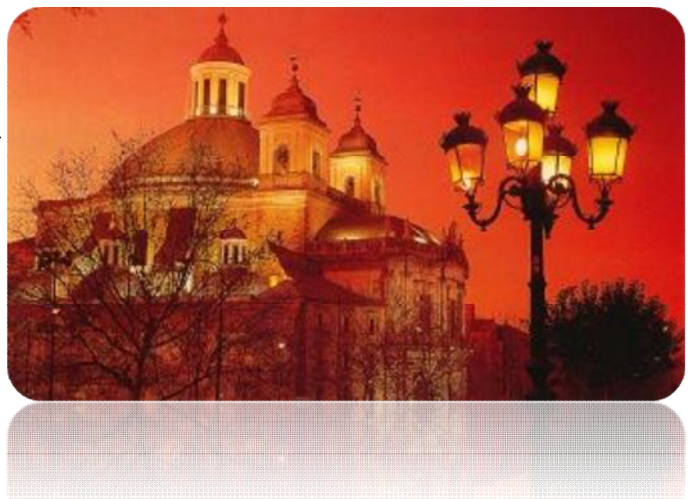
ところで、今日から受難節が始まりました。キリストの忍耐と苦しみの受難の週は、イエス様がロバの背に乗ってエルサレムに入場された「棕櫚の日曜日」(今日)から始まります。今週、私も、十字架への道を辿りながら、私たちのすべての罪と咎を負ってくださった神の小羊のみそばに近づかせていただきたいと願っています。

(写真: 松林幸二郎さん撮影 ドイツ語名、Osterglocken オースターグロッケン、「イースターの小さな鐘」という意味)

●心の病からの回復

ところで、これまで、何人かの方から、「工藤さんはどうやって幻聴・幻覚を克服なさったのですか？」「どのようにして鬱病(1月のメルマガに書かせていただいた内容)から癒されたのですか？」というお問い合わせをいただきました。いつかメールでご紹介させていただこうと思いつつ、今まで果たせないでいました。今日はその方々へのお返事も兼ねて、回復の経緯を書かせていただくと思います。少し長くなってしまいますことを、どうぞお許してください。

私の幻聴幻覚は、中学の頃から始まりました。今思えば、一番の大きな原因は、私が願うように愛情を注いでくれない母と、その母の愛情を一心に受けている知的障害者の妹へのうらみつらみがどんどん大きくなっていった結果です。小学校の頃は、うっぶん晴らしの万引き、どもり、自律神経失調症、対人恐怖症という症状が起こるようになり、中学へ入ると、どこにいても「篤子！」と怒鳴る母の叫び声がひんぱんに聞こえてくるようになりました。同時に、カーテンにも床にも壁にもたくさんの人の顔が浮かんで見えてくるようになったのです。



そのような状態が続く中で27才の時、大好きだったスペイン音楽を勉強するために、マドリッド国立声学院に留学しました。そこでダニエル&クラウディア・アンデルード宣教師夫妻に出会い、彼らに導かれてイエス・キリストの救いにあずかりました。

ダニエルは、私の幻聴・幻覚の癒しのために、何度か祈ってくれました。祈ってもらった時は、しばらく正常な状態が続くのですが、しばらくするとまたもとの状態に戻りました。ダニエルは、そのつど私を励ましてくれました。

「それでも自分はイエス・キリストに愛され受け入れられている『神の子』であることをいつも確認するのですよ。日々自分の罪を告白し、どんな罪をも赦してくださる神に感謝を捧げなさい。みことばで心を満たしなさい。そして、癒されたいという願いさえ十字架につけて、どのようなときにも、キリストへの『信仰によってのみ』生きるのです」。

(写真: マドリッド時代、私が住んでいた通りに建つサン・フランシスコ寺院。この寺院の後ろに落ちる真っ赤な夕日の美しさは感動的です)

3年後、私は、アンデルード宣教師の同労者として、ドイツへ開拓伝道に向かいました。そこで、私にとってショッキングな出来事が起きました。それまで一番信頼していた宣教師夫妻から大きな誤解(今思えば実に小さなものでした)を受けたのです。そのショックで、私はある朝、ベッドから起きられなくなりました。それが数日続いたとき、これが鬱病というものなのだと気付きました。

しかしある日、朦朧とした状態の中で、「主よ、こんな哀れな私を救ってください！」と叫ぶように祈ったのです。

そのとき、私の頭(かしら)を引き上げてくれたのが、Ⅱコリント 3:16~18 でした。

~face to face~

「しかし、人が主に向くなら、そのおおいを取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」(Ⅱコリント 3:16~18)

ここを読んだとき、ハッと気付いたのです。今、自分のすべきことは、下(自分)ばかり向いているのではなく、顔を上げて主のみ顔を見つめることだと。あの時私が読んだのは、ルター訳のドイツ語聖書でした。18節は、ルター訳では「ひとつの栄光からもうひとつの栄光へ」と書かれてありました。それを読んで、私は、face to face の生き方を続けてゆきさえすればよいのだ、そのように生きる中で、御霊なる主は、キリストのみ姿に向かって、私たちをひとつの栄光からもうひとつの栄光へと変えてくださるのだ、ということに悟るようになりました。

face to face の生き方を続ける中で、顕著に示されるのは私たちの罪です。光に照らされれば照らされるほど、どんなにきれいなガラス窓の小さな汚れでもはっきり見えてくるように、私たちのどんな小さな罪をも示されるようになります。私がまず最初に示されたのは、私を誤解した宣教師を「赦せない罪」でした。それから「愛せない罪」、こんな目に合っているのはあの人たちのせいだ、という「恨みの罪」…それを告白していったとき、真実で正しい神は、その罪を赦し、私をきよめてくださいました。(Ⅰヨハネ 1:9)

しかしこれらのプロセスの全てが一度に起こったわけではありません。数ヶ月間そのように、そして聖書のあちこちのみことばに教えられながら生きてゆくなかで、私は癒され、変えられてゆきました。そして、宣教師から受けた誤解など、全く取るに足りない出来事であったことに気付き、以前にも増して彼らを愛する者に変えられていたのです。幻聴、幻覚から解放されたのも、はっきりとは覚えていないのですが、この時期だったのではなかったかと思えます。

face to face の生き方のもうひとつは、キリストの十字架を見つめることです。そうすれば、神の愛が心に迫ってきます。



「しかしまだ私たちが罪人であった時、キリストが死んでくださったことにより、神は私たちへのご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:8)

この受難週、今日の「棕櫚の日曜」のエルサレム入場から、「最後の晚餐」、「ゲッセマネの祈り」、「キリストの逮捕」、「弟子たちの裏切り」、「裁判」、「鞭打ち」、「ひとりになった夜」、「十字架への道」、「十字架の贖い」そして、輝かしい復活まで、この一週間、皆様にとっても私にとっても主の深い愛で満たされる時となりますことを、心から願っています。

(写真: 先週紹介させていただいたラウエス・ハウスのそばの家の壁にからまるつたの十字架の姿に感動し、逆光だったので、皆さんにもお見せしたくて撮影しました)

●お祈りください

1. いよいよ、4月11日から21日まで、「アウシュヴィッツ、ルターとバッハのふるさとを訪れる旅」です。参加者は10名。うち、未信者は、何と私の身内である父といとこ夫婦の3人です。あとの7名は、クリスチャンです。どうぞ、父といとこ夫婦の救いのためにお祈りください。この旅行中、参加者全員の健康が守られ、互いに思いやり、参加者だけでなく旅の先々で出会う方々にとっても大きな祝福となりますよう、お祈りください。

2. 8月、ブラジルの6都市で計画されている賛美コンサート・ツアーのためにお祈りください。以下、コンサート実行委員長の森ロイナシオ師より、プレイヤー・レターをいただきましたので、皆様も、今から祈りお支えくださいますよう、よろしく願いいたします。

「日本の禱援者の皆様へ」

ブラジル工藤篤子コンサート実行委員長 森ロイナシオ

主イエス・キリスト様の御名を賛美します。

主のお導きによりまして、今年8月に工藤篤子さんをブラジルにお迎えし、伝道コンサートをしていただくことになりました。ブラジルでは6つの都市でコンサートを行います。これはブラジルの日本移民100年祭の記念行事の一つとして、日系キリスト教連盟が主催するプログラムですが、各地の日本人会や市役所が後援して下さる慶祝イベントとなります。現地ではコンサートに期待し祈り、着々と準備を進めています。日本の皆様方も、ぜひ工藤さんのブラジル初公演のために、お祈りください。主が、工藤さんの歌と証しを通して、福音の恵みを人々の心に植えつけてくださるようお願いしています。特に高齢の日本移民の方々には、福音を聞く大切な機会なので、彼らの救いのためにお祈りください。主が皆様を豊に祝福されますようにお祈りしています。主にありて。

今回は、少し遅くなりますが、旅行から戻りましたら、報告のメルマガをお送りさせていただきますね。イエス様が、御自身の大きな愛を、今週私たちの心に今ひとたび豊かに注いでくださいますように！皆様の祝福を心からお祈りしています。

工藤篤子

お詫び: メルマガに度々吉野輝雄さんの写真を使わせていただいておりますが、今年に入ってから、2度もお名前を間違えて照雄さんと記載してしまいました。その前にも、輝夫さんと記載してしまったこともあります。この場をお借りして、心よりお詫び申し上げます